

<翻 訳>

トーマス・ムルナー：阿呆祓い（3）

名古屋初期新高ドイツ語研究会訳

（代表 精園修三）

ここに翻訳したのは1512年に刊行されたThomas Murner: Die Narrenbeschwörungの第11章から第15章までである（第10章までは『中京大学教養論叢』第38巻第4号，第39巻第2号に所載）。使用テキストはFranz Schultz編集のムルナー全集Thomas Murners Deutsche Schriften mit dem Holzschnitten der Erstdruckeの第2巻（M. Spanier編，Walter de Gruyter 1926年刊）を使用し，適宜Kürschner: Deutsche National-Litteraturの版等を参照した。また戦前のレクラム版でこのテキストの現代語訳（Universal-Bibliothek 2041-2043, Die Narrenbeschwörung von Thomas Murner. Erneut und erläutert von Karl Pannier. 1884 Leipzig）を参考にした。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年版）に拠った。

この翻訳は，名古屋初期新高ドイツ語研究会が1994年6月から，メンバーが分担して訳していたものを，最後に共同で検討修正したものである。1998年12月現在のメンバーはつぎのとおりである。青木一行（名城大），木野茂（藤田保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），橋本忠欣（福井大），松尾誠之（愛知県立大），森昌弘（名大名誉教授），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

訳分担表（括弧内は何らかの事情により今回の翻訳原稿の整理を代行した者）

第十一章 森

第十四章 大沢（精園）

第十二章 山田

第十五章 工藤

第十三章 青木

第十一章⁽¹⁾ 藁のひげを作ること⁽²⁾

誰だ、神と争い、

神に藁のひげを作ろうとする奴は。

その上神と猿芝居をするのは。

神がいつまでも辛抱されると思うなよ。

今辿り着いた一群は正にそういう手合いで、

全世界と神を嘲笑し、

神と知り合いであるかのように、

猿芝居の神を作り、

5 自分たちは神のいところで、

良いことをしようと悪いことをしようと、

神は決して人間には怒られないと主張する。

しっかりくっついているが、

そのままでは伸びることのない

10 藁のひげを、彼らは神に作っている。

奴らには特別の術を使わなければ、

お祓いは全く無駄になるだろう。

だがここで、敢えてやってみよう。

まずは歓迎の挨拶だ。

15 「これは、ローレンツ⁽³⁾様、宜しく申し上げます。

あなたも今、聖書から迷い出たのですか。

as は atis と変化するのですか⁽⁴⁾。

あなたのところに阿呆が沢山いました。

あなたに神の救いがありますように。

20 あなたは教会の内陣に立つが、

頭の中は別のこと。

ベニスの戦いのことを、

王はミラノで何をしているのか、

- あるいは、イタリアのヴェローナで
25 戦いの様子はどうだったのか、
パドヴァはすぐに占領されたのかと尋ねる。⁽⁵⁾
それで阿呆たちのところへ連れて行くが、
あなたは神に薬のひげを作り、
ミサのことは頭はない。
30 さてあなたは、祭壇へ進んで
他の司祭を助けに来たつもりだが、
すぐに『今日は』と言って、
どこで休むのか尋ねる。
するとパンタローネ氏⁽⁶⁾がやって来て、
35 新しい話を籠一杯持って来る。
あなたはそれでお喋りのミサを始める。
嘘の話ををたくさんすると
やっと祭壇に立とうとして、
フェンシングのような格好をする。
40 これが薬のひげを作ることだ。
フェンシング場にいるかのように、
大勢があちこちで構えの格好をする。
こちらではまたも大口を開けて欠伸をし、
犬が屠殺台へ連れて行かれるように
45 すぐに目を伏せる。
これは司祭のやることではない。
ぺちゃくちゃやる口を閉じろ。
祈りの言葉で口をすすいで、
お喋りの場所は、外か
50 どこか別のところに用意せよ。
キリストが生きておられたら、大事なことだが
キリストは神を敬うことをもっと教えられ、
阿呆共を、聖堂の中のお喋りたちを、
追い出されることだろう。

- 55 大口開けた阿呆め、どこで習ったんだ、
神に背を向けて、
教会の中をぶらぶらし、
阿呆共の手を引いてやることを。
ローレンツ殿、どうかお願いだ、
60 そうということが二度と起きぬようにしてくれ。
こういうことを減らすなら、
私はお祓いを止めて、
お前のやり方を認め、
神のお陰と感謝しよう。」
- 65 ローレンツ氏のことはもう考えたくないので、
今度は、もう少しましな
別の面白い話をしよう。
聖職者すべてが一生懸命になったのは、
この世の財を手に入れて
70 藁のひげを神に作るためだ。
キリストは物乞いをして歩き、
聖職者が今持っているような、
お金もこの世の財もなく、
国も町も持っていなかった。
- 75 今木の葉は裏返しになって、
聖職者の習うことは、下らない
儂い金銭を手に入れることで、
すべてが灰まみれになっている。
今高位の聖職者になっても
80 心配事と大きな関心は、
教会の食料を奪って
自分の縁者や、さらに子供にも
教会の財産を贈ることで、
高位の聖職者なら当然、
85 遺産を持って生まれてくるかのように、

- がちょうから羽を取って来る。
これはおべっか使いのよくやることで、
キリストの教えを利用して
こう言う、「キリストの身内は
90 いつも沢山そばにいて、
身内には特別に
名誉と尊厳を贈られた」と。
また間違った助言や恥ずかしい嘘で、
まじめな人をすぐ騙す。
95 しかしすぐ嘘をつかれた人は、
騙されたいのだろう。――
教会に立ち、心にもないことを
祈り、口を大きく
開けたり閉じたりする人は、
100 尻軽女のすることも考えているし、
ロザリオの珠の数を数え、
おかしなメロディーが始まると、
オルガンの響きに合わせて歩き、
あるいは若い神父でもいると、
105 何も分からずに他の阿呆と、
馬が飼い葉桶から食べるように、
口の中でむにゃむにゃ祈るが、
心の底から出て来る言葉ではない。
これ即ち阿呆頭巾を手に入れて、
110 神に藁のひげを作ったこと。
ある時知り合った阿呆女は、
いつも本を手にしてしたが、
一生かけて学んだのは、
ページをあちこちめくこと。
115 けれどもこの女はいつも、
成り行きに任せ、ヘブライ語、

ドイツ語、ラテン語でお祈りをする。

祈っている女は、こんなものなんだろう。

暖炉の後ろは暖かい。⁽⁷⁾

- 120 私たち、思慮分別のない
司祭、修道士、はたまた修道女が
祈るのは、神から憐れみを給うこと。
言ってることが自分では分からなくても、
神には毎日、私たちと
- 125 信徒の罪を訴えねばならぬ。
それは、私たちが聖職の使徒であり、
神に対しても、祈りとミサで
これを忘れぬように、
托鉢のパンを食べるからである。
- 130 このように私たちも阿呆に取り憑かれている。

注

- (1) 現世の、また政治的な名誉や富を獲得しようとする、聖職者たちへの批判。
- (2) 人にあることを信じ込ませる、でっち上げたことを言いくるめるの意。
- (3) 怠け者や美食家を意味する。
- (4) ラテン語を用いて単に学識を誇示した言葉で、ここでは特別な意味はない。
なお as (単位) は属格は assis で atis という変化形はない。
- (5) マクシミリアン I 世は、1510 年に神聖ローマ帝国皇帝となったので、ここでの王はマクシミリアン I 世のことである。1508 年 12 月に、彼やフランスのルイ XII 世、当時の教皇ユリウス II 世等が、カンブレイの同盟を結び、当時のベニス共和国に対抗して戦った。1509 年にベニスは包囲された。
- (6) 第 5 章にも出てくるが、当時のイタリアの喜劇に登場する人物。
- (7) 下らない言い逃れをいうこと。

第十二章⁽¹⁾ 伊達阿呆を灰汁につけること⁽²⁾

私は、伊達阿呆とみなすすべての人々を

灰汁につけ、漂白もしなければならない。

伊達阿呆どもをまたすっかり利口にするには、

どんな灰汁も決してじゅうぶんではないのだが。

伊達阿呆を灰汁につけるには多くの知恵が必要だが、

その際に私が収穫を得ることなどめったにない。

私がすべての人を灰汁につけて賢くしなければならないとしたら、

強い灰汁を使わなければならないだろう。

5 今や伊達阿呆どもがしゃしゃり出て、

態度ででも、振る舞いででも

世間のみなに阿呆棒を見せるが、

誰も連中を言葉でもって黙らせることはできない。

ある者はボリボリ掻きむしり、もう一人はポーッとしていて、

10 三人目はよだれをたらしている。

こういうことをするのは、甘やかされて育ち、

まったく躰けられておらず、

よその国で礼儀作法を学んだこともない

若い市民たちで、

15 連中は、この世は極楽だ⁽³⁾、ろばの糞など

この世に存在しない、と思っている。

私が無作法にも連中に

伊達阿呆になることを教えねばならないのだとしたら、

四百ポンドもらっても、

20 さっき連中のところで見つけたものを見たくはない。

そいつの頭はあちこちに揺れ、

髪は卵白できれいに縮らせてある。

それからそいつは頭を下へ、上へと振り、

次いで後ろに、また斜めにと振るが、

25 自分の頭をまっすぐにしておくことができない。

それでそいつは必死にもがき、

若い子牛たちのように浮かれて跳ね回り、

自分は正しいと思って、自分自身で答える。

まるで「お前はおれを知らないのか」と言っているように、

- 30 軽蔑的に口を突き出す。
ああ、阿呆よ、私はお前をよく知っているさ、
私に伊達者税を払え。
あらゆる振る舞いが、お前の心と
お前の心情が内に秘めているものを漏らしているのだ。
- 35 そのことについては両親に責任がある。
両親はお前たち子牛に、
お前たちがそんなに気まぐれになってしまい、
今や伊達阿呆の教団を率いることになるような、餌を与えた
のだから。
それからお前たちははかない財産に目をやり、
- 40 しばしば乞食の杖を手にするはめになる。
だからもしお前が、お前の父の一族全員を、
つまり、お前の父とそのすべての親類縁者を辱めるならば、
お前を躰けることができなかったということで、
それは父にとって当然の報いなのだ。
- 45 お前の父は職人だったが、
お前は自分を貴族だと偽っている。
田吾作貴族というのがお前の名前だ、
お前の親戚はみな田舎の出身なのだから。
鐘を鳴らし、鍵を持ち、
- 50 本の頁をあちこちめくったりする、
その際に私はお前たちみな的身分を見破って、
臆することなくお前たちを伊達阿呆と名付けたのだ。
お前たちはあまり知恵を尊重しない、
だから今お前たちは伊達阿呆のままなのだ。
- 55 ズボンを派手にし、鏡を見て、
女のように装飾品で装う。
固めた口ひげ、縮らせた髪、
レースの胸当て。様々な純金の飾りを
シャツに縫いつけさせるけれど、

- 60 それでお前はお尻を拭う。
ズボンとジャケットは、後ろと、前と、
真ん中に切れ目が入れてあるが、
これらはすべて伊達阿呆のやり方で、
こうやって連中はうろつき回る。
- 65 伊達阿呆は大学で見かけられるが、
連中のできることといたら色事だけだ。
絹の縁なし帽子が連中の学問で、
時間をむだにする以外にはなにもせず、
賢そうな振りをしたが、
- 70 昔も今も相変わらずがちょうにそっくりだ。
ガーガーよ、可愛いがちょうよ、あっちへ行け、
ろばの耳がお前の収穫だ。
そのほかにも、しばしば阿呆棒を売り歩き、
教会へ行きはするが、
- 75 それは自分たちを礼儀正しいと見せるためだけであって、
尻軽女を探し出すまで、
歩き、目配せし、振り返るような
連中が大ぜいいる。
そういう連中が、伊達阿呆だけやってくれていて、
- 80 犬を教会へ連れて行ったりせず、
木靴をはいてせわしく動き回ることをやめて、
阿呆を家の止まり木に止まらせ、
当然すべきであるように、
教会では神と話をしようと考えてくれて、
- 85 教会で女の子を追いかけてたりせず、
ほかの人たちを激しく挑発したりしないといいのだが。
私は伊達阿呆を世間でもっと大ぜい見つけるが、
連中は愚かな振る舞いにいそしんでいる。
連中は煮られて、皮を剥がれたとしても、
- 90 そこには体裁のいい愚など一つも見つからないだろう。

どんなに頻繁に耳を振り動かしても、

伊達阿呆はそうすることで、

自分の鼻の前にぶら下げている

羽をフーと吹く以外には、なにもできはしないのだ。

95 伊達阿呆のやり方は決して誰にも気に入らないだろう。

そうすると連中はこう言うのだ。「ああ、神よ、

ここに阿呆祓い師がいて、

この阿呆もちゃんと灰汁につけてくれますように。」

注

- (1) この章は、流行を追う人々と、上流階級の習慣の悪いものだけを真似する高慢知己を批判している。
- (2) 原文は *Fantasten beitzen*。Fantasten には「妄想家」，「高慢知己」，「阿呆」などの意味もあるが、ここでは *Modenarr*「流行を追う人」の意で用いられている。beitzen は「塩，酸，灰汁などにつける」の意。
- (3) 原文は *der hymel hang vol gygen* で、諺。「有頂天である」の意。

第十三章⁽¹⁾ 袋⁽²⁾の繕い。

たとえ絹で織られていても、

この世にあれば 私も袋に相違ない、

物分かり良くまた悪く

他の袋ともども暮らして行こう。

「袋」が誉め言葉になったためしはない。

そう呼ばれたら、女はまさに恥ずべきだ。

袋なんどと言われたら、

女の恥辱 これに過ぎたるものはない。

5 気高く純なるマリアに免じ、

袋たちを放任し、

穩便に済ませておきたかったけれど、

しかし、「あ奴は事実を蔭蔽し、

口に指当て 押し黙り、

10 女を甘やかしている」などと、

誰ぞがいうやも知れぬゆえ、

その配慮もせにゃあならぬ。

私の加持、ご祈祷に不審の気配がある時は、

女の名誉を守るため、

15 その真実を被い隠し、

浮気な者にも手心加え 扱ってやろうの親心。

ゆえにお前たちには教えておく、

たとえ引き裂かれたる袋でも、

もとのとおりに繕えば

20 真っ当うな気持ちに返してやれるということを。

二人の男に同時に愛を囁いて、

ついには一人が相手を殺すという、

大事を惹き起こすとしたなれば、

そういう女は袋と言えるだろう。

25 金、甘言に誘われて

間夫との仲に不義の子をつくり、

その巢に置き去りにするなどは 袋女のやることだ。

金銭や土地、品物のためならば

実のわが子も売り払い

30 さもない時は聖堂前に棄ててゆく、

そういう女も私は袋と思っている。

また、律義な亭主を見つけだし、

可愛い子供をたんと産みながら、

破廉恥行為と思わずに、

35 修道院への遍歴や、

司祭館への通い妻、

依頼もされぬにご用大事と待つ奴も、

私は袋と見做している。

男の浮気を誘うよう

- 40 破廉恥女が聖堂参りをすることも。
そんな袋は隅のほうに放り出せ！
聖母マリアの祝い日に
恥知らずにも その身の裂け目を繕わせんと
男を物色する奴も、
- 45 私は袋女と呼んでいる。
この時、多くの袋には
そちこち惨めに穴があき、
私が繕いを始めたら、
手間賃取っても損がゆく。
- 50 ポティファル⁽³⁾の妻は袋だった。
ヨセフの体に情欲を燃やし、
純潔なるヨセフに対し
女が情事を仕掛けたのだ。
良く似た袋は この世に多く居るもので、
- 55 こういう女は 厚かましくも埒踏みはずし、
男に頻りと懇願し、
おのが袋をそっくりすべて はたき出してしまうのだ。
私の袋の紐までも 引き千切らせようと
一心不乱に娘を仕込む
- 60 母親たちも袋といえる。
さらには淫売宿にて公然と、
私の袋の底までも 切り裂こうと試みた
多くの女を覚えている。
私の記憶に誤りなくば、
- 65 私の袋が一度に二つ 空にされたこともある。
以前、ひどい女が居た。
事もあるうに十二使徒の祝日に
とほうもないことを目論んだ。
朝食の席にその女は
- 70 十二人の情夫を招いたのだ。

- 私はその名をすべて知っている。
他人^{ひと}目^めを忍んで密かに女が手招ぎすれば、
自分が一番好かれていると 誰もがみんな思うもの。
こんな女を情婦^{いろ}に持つ、
75 まことおめでたい連中は、
女どもの根性を 私が杖で叩き直してやるほどに、
その後、女を貰い請けて行くがよい。
クレオパトラ⁽⁴⁾は袋だった。
この袋ゆえ アントニウスは破滅した。
80 とかく女というものは みなこういう男を籠絡し
袋の中に入れることができるのだ。
ヘレナ⁽⁵⁾は袋を作り終え、
そこへ国と民とを放りこんだ。
あの王国とトロヤの町を、
85 悪い袋は亡ぼした。
だが、その袋女みずからの
家の底も 遂には抜け落ちた。
袋に悪魔が隠れ棲み、
それゆえ多くの男を窒息させてしまうのか？
90 バト・シェバ⁽⁶⁾も 袋を編もうとしたのだが、
しかしダビデ⁽⁷⁾はこれに気がついた。
もしこの袋を直ちにダビデが破り捨てなかったその時は、
神のみ前に出た折りに、
お咎めなしでは済まなかったろう。
95 だがダビデは折よくその編み糸を断ち切って、
袋の重荷を負うこともなく済んだのだ。
女の節度、女の名誉を勘案し、
もうこれ以上 私は袋のことを口にすまい。

注

- (1) 恋愛沙汰を事とし、無為にすごす女性たちを叱責する章。

- (2) 淫靡の暮らしに堕し、情事に耽る女。また男女に限らず、心に潜む情欲を袋に喩えた詩句も多く現れている (V. 57, 58, 62, 65, 90, 92 etc.)
- (3) ポティファル: パロの侍衛長でエジプトびと。ヨセフをエジプトに連れて行ったイシマエルびとから彼を買い取った。ヨセフは姿、顔が美しかったのでポティファルの妻はヨセフに目をつけて、情交を迫ったのであった。創世記 39, 1-10.
- (4) クレオパトラ: 古代エジプトのプトレマイオス王朝の女王で、西暦前 51 年から前 30 年まで在位した。シーザーの愛人となり、のちにアントニウスと結婚したが、アントニウスがシーザーとの争いに敗れて死んだ時、毒蛇に胸を噛ませて自殺したと伝えられている。
- (5) ヘレナ: ゼウスの娘、ラコーニアのスパルター王メネラーオスの妃。ペーレウスとテティスの結婚式の席でおこった三女神 (ヘーラー、アテーナー、アプロディーテー) の美しさ争いで、その審判を任されたパリスがアプロディーテーを選び、礼として、ヘレナを得ることとなり、メネラーオス王がクレーテ島に旅立ったあと、パリスはヘレナと財宝を掠めてトロヤに帰った。これを契機に、ヘレナの義兄のアガメムノンがメネラーオスとともに、十万人、船舶にして約千艘のギリシャ軍をアウリスに勢揃えし、トロヤの攻略に向かうのである。パリスの死後、ヘレナはラコーニアのアミュクライ王、デーイイボボスと結婚した。
- (6) バト・シェバ: 誓いの娘の意。エリアムの娘でヘテびとウリヤの妻、身を清めていた時、裸身をダビデに見られ、ダビデの子を宿した。ダビデはバト・シェバを娶るために、その夫ウリヤをラバの町をめぐる激しい戦いに赴かせ、戦死せしめた。(サムエル記下 11, 1-17.) ウリヤの死後、ダビデの妻となった。ソロモンの母。同 12-24.
- (7) ダビデ: 愛される者の意。サムエル記上下、歴代志上下、列王紀上、などに多くその名が見られる。ベトレヘム人エッサイの 8 番目の末っ子で神が嘉みした者であった。ダビデを見て神は「立ってこれに油を注げ。これがその人である」と、言われた。サムエルが油の入った角を取り、ダビデに油を注いでより、「主の霊がはげしくダビデの上に臨んだ」と、聖書に書かれているのが、ダビデの名が現れる最初である (サムエル記上 16, 6-13)。

第十四章⁽¹⁾ 猿の毛を剃ること⁽²⁾

これだけは全くもって困ったことだ。

われらが猿には尻尾がなく、
自分の恥部を隠しもせず、

尻も同じくむき出した。

自然が隠したものを、
どの猿も覆わず、
尻を丸見えにし、
人目にさらして楽しんでいる。

- 5 自分の恥を隠せずに、
しゅっちゅう犯した
悪事をしゃべる奴、
そ奴を私は猿と呼ぶ。
恥ずかしがるのが当然なのに、
- 10 褒められる、とでも思っているのだろうか。
古い昔の話では、山羊をつれた仕立屋のように⁽³⁾、
何も隠しておけないで、
知らないことだけ黙ってる
猿もかなり多いそうだ。
- 15 こういう猿は、自分の気持ちをあけすけにしゃべり、
警戒される。
放火、刃傷沙汰をやらかすときは、
四年前から相手を脅迫せねば気がすまず、
あたり構わず言いふらす。
- 20 こういう猿は警戒しやすい。
尻尾があって尻を覆い、
あけすけなおしゃべりを控えれば、
何かの役に立てるだろうに。
そうではないから全裸の仲間と跳ね廻っている。
- 25 猿知恵や色事遊びは
ハイデルベルクのわが猿⁽⁴⁾の得意技で、
尻にそう書いてあり、
表沙汰にならなかってためしがない。
それを自分でみんなにみせる、

- 30 サムソン⁽⁵⁾が髪の毛の秘密をもらしたように、
 隠し所を覆えないからだ。
 お前が鳥を騙して、
 網の中へひきよせたければ、
 網を藁で覆い、
- 35 あけすけに見せてはならぬ。
 というのはいま世の人々は非常に狡賢い。
 誰かが水を差し出したら、
 その下に火があると思うがいい。
 だからこうした策略にも備えよ。
- 40 誰かがうまいことを言っても、
 ひどい企みに気づいたら、
 そ奴に言葉でやり返せ、嘘偽りで
 やり返すのだ、いいか、騙してやれ。
 というのは、今悪党を捕まえようとすると、
- 45 代わりの悪党を空席に立たせる必要がある。
 狐を狐で追い払うのは良くない。
 両方とも悪党根性が染みついている。
 今は一番身近な親戚に気をつけろ。
 断言するが、みんな狡賢いのだぞ。
- 50 世間は今互いに騙しあうまでに、
 悪事に精を出している。
 狡智を弄して万人を欺くこと、
 それができるのが、世渡り上手と言われる。
 だから、おい、猿にされないように
- 55 気をつけろ。
 自分の企みはこっそり隠しておけ。
 お前を信じて忠告する。
 さてここで、胸をはだけて、
 それを隠すと、中で息が止まると恐れている
- 60 雌猿の話もせねばならぬ。

- その雌猿は半分以上乳房をさらし、
バト・シェバ⁽⁶⁾同様、脚も見せる、
その脚のなんと滑らかできれいなことか、
漉し紙で漉した牛乳と
65 血をいっしょにそそいだその脚は。
雌猿たちには外見が気になるのだが、
しょせん中身ははらわただ。
私が女嫌いなら、
もっといろいろ話したい。
70 猿の毛を剃る話をせねばならぬ。
腹にしまって置けぬのだ。
最近のこと、
好きな女に、すべすべと
一本残らず毛を剃られ、
75 家屋敷ごっそりこすりとられた猿がいた。
一切合切奪われて、
乞食杖つく身になって、
今はもう日々の暮らしもままならぬ。
このように猿の毛は剃られる運命にある。
80 女たちはいい作法を心得ていて、
貰える物は拒まない。
私は誓って、神かけてそう信じている。
女たちは死んでもお金を貰う。
「ねえ、あなた、贈り物買って来て。
85 お年玉持って来て。
それ頂戴、あなた、もっと頂戴。」
欲しがるのを聞いていると、頭が痛い。
せびられ、日々ねだられ、
猿の毛が剃られることから、
90 誰もがもっと賢く身を守らねばならぬ。
ぶどう酒を飲んで暖をとり、

心臓を汗にかえて排出するとき、
 自分の企らみをひけらかし、
 秘密をすべてばらしてしまう

95 猿は大勢いるものだ。

猿の話はこれで終わりだ。
 自分の恥をしゃべりまくる猿は
 我が身の害になるだけだ。

注

- (1) この章は、自分の恥を平気で口にする人々にたいする批判である。
- (2) 「毛を剃る」scheren には「からかう」「愚弄する」の意味もある。
- (3) 山羊を盗み、尋ねられもしないのに言い訳をして、馬脚を現した仕立屋に対する当時の嘲笑歌に由来するらしい。
- (4) ハイデルベルクの昔のネッカー橋には猿の碑が立っていて、市のシンボルになっていた。
- (5) 自分の力の秘密をもらしたため、捕らえられた男。旧約聖書、士師記、16. 17 以下参照。
- (6) 第 13 章，注(6)参照。

第十五章⁽¹⁾ 喧嘩の口実を見つけること⁽²⁾

人を陥れようと思うなら
 私は口実を見つける。
 私はあまりに多くの人をだましてきたので、
 口実はみな利用し尽くした。

これを信じない者には教えてやろう、
 いつの世も三人いれば一人は阿呆にされるということを。
 革を食べた哀れな小犬が
 受けた仕打ちのように⁽³⁾。

5 犬を憎らしいと思い始めたときは、
 犬が革を食べたことになってしまう。
 今この世に誰か

徳を積んで価値ある人がいるならば、
悪人たちは大弱りだ。

- 10 連中は恐れる、その徳ある人が市参事会に行って
自分らの悪事を罰しはすまいかと。

そしてその人の幸福と
仕事と名誉の邪魔をして、
でっち上げの嘘で抵抗する。

- 15 そして身に覚えのないぬれぎぬで
男を訴える。

本人はまったく知らないのに、
あれをやった、これをやったと言い立てられる。
たとえば昔、ある教団で、

- 20 ひとりの坊さんが修道院長になった。
その人はまったく敬虔で、名誉ある人で、
修道院にいいことをたくさん行なったが、
他の坊さんたちは不安になった、
生活態度を改めるために、

- 25 修道院長が彼らにもっと厳しくなり、
もっと敬虔な改革を行なうのではないかと。
他の坊さんたちはすぐさま自分たちの垣根に走り、
そこから急いで口実をもぎ取り、
修道院長を車⁽⁴⁾に縛り付けた。

- 30 また坊さんたちは修道院長を訴え始めた。
修道院長はまったく気が狂っており、
これは教会全体にとって困ったことだと。
坊さんたちは、悪霊に憑かれた人に行なうように、
修道院長の頭上でたくさんの鞭をふるう。

- 35 「言ってくれ、お前は俺たちを改心させたいのか。
俺たちはお前を聖アナスタシウス⁽⁵⁾のところへ連れていこう
と思う。」

善良で敬虔な人は気が狂ったことにしておかねばならなかった、

- たとえ雷が落ちてこようとも。
さて、坊さんたちがさらに何をやったか聞いてくれ。
- 40 やつらは権謀術数をめぐらして
悪い高位聖職者を選んだ。
自分たちに便宜をはかることができ、
あるがままにさせてくれて、
おまけに何も新しいことは始めない人を。
- 45 高位聖職者は言った、「私にどうしろと言うのか。
この件については何もできない私に。」
そこで坊さんたちは、高位聖職者の身分を保証し始めた。
ある者はその聖職者に高位高官を金で売り買いすること⁽⁶⁾
を教えようとし、
またある者は司教冠のかぶり方や
- 50 司教がするような振る舞い方を教えようとした。
坊さんたちはまた高位聖職者に堂々とした、威張った歩き方を教え、
司教杖の持ち方を教えた。
誰もがその聖職者に教えようとした、
高位聖職者らしく暮らすにはどうすべきか、
- 55 高価な服を着るには今どうすべきかを。
誠実さを口にする人は誰もいない、
ただ高慢とうぬぼれだけを口にする。
坊さんたちが垣根からもぎ取ったのは、
卑劣ないかさまではなかったか。
- 60 こうしたことは聖職者に限らない。
今では世間一般がやっている。
支配者は政権をとることにきゅうきゅうとしており、
その結果息子が父親を捕まえる。
兄は弟をいたわらず、
- 65 しまいには争いの口実を見つけて
弟を捕まえる。
そういうときは弟を狂っていることにしておかねばならない。

弟は兄がこの世で覚えたよりも
多くの分別と巧みな仕草を身につけている。

- 70 それなのに弟は鎖に縛られ、
むりやり狂人にさせられる。
今や世の中はかくも悪人に満ちている。
たとえ君主が支配する力を持っていても、
人々は多くの策を弄し、

- 75 ついには君主をその職から追い払う。
人々はあちらこちらで
彼を詐欺師だと訴える。

しかし悪人ども自身このように嘘をつき、
神と全世界を欺いている。

- 80 私自身しばしば嘘をつかねばならなかった。
挨拶するところでののしり、
祈るところで呪わねばならなかった。
それでしばしば不思議に思ったことだが、
卑劣にも争いの口実を見つけて

- 85 多くのくだらないものから
高額な金貨をもうけている人に
主なる神は罰を与えない。

ソロモンが書いているように⁽⁷⁾、
自分の友を失脚させようとする

- 90 つまらぬ人間は争いの口実を捜すものだ。
皇帝に税を納めさせるのを

イエス・キリストが望んでいないと言って
ユダヤ人たちがイエスにかみついたのも
まったくくだらないことであった⁽⁸⁾。

- 95 垣根からもぎ取られたものは、
必ず報いを受ける。
しかし今、すべてが正されてしまったら、
最後の審判は何のためにあるのだろうか。

注

- (1) この章はぬれぎぬを着せることへの批判である。
- (2) Ein Sachen ab dem zun (=Zaun) brechen 喧嘩の口実を見つける。以下本文中、垣根が出てくるときはこの慣用句が前提になっている。
- (3) 犬が革を食べた (Der Hund hat das Leder gefressen) という言い回しは古来慣用句として使われ、その意味はさまざまに変遷してきているが、ここでは食べてもいない犬に言いがかりをつけ、ひどい目に遭わせることを意味している。本作品第三十一章も参照のこと。
- (4) 狂人を運ぶための車。
- (5) 悪霊に憑かれた人の守護聖人。
- (6) 原語 beissen は鷹狩りであるが、ここでは比喩的に官職をあさることを指している。
- (7) 旧約聖書、箴言第 3 章 29 - 30 参照。
- (8) 新約聖書、マタイによる福音書、22, 15 - 22 参照。